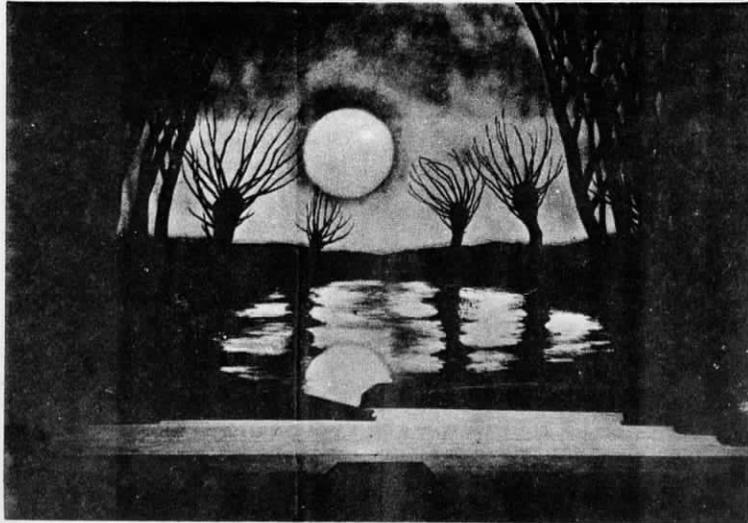


毎月一回15日発行 昭和50年3月15日発行・第63号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

3月号



Libertaire VoL, VI, No 4

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和50年3月15日発行第62号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1975年3月15日発行 VoL, VI, No. 4
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

今月のことば

昔 太陽の季節
政治の季節

— 石原慎太郎君 —

三選出馬
四頭(党)目は都民党

— みのべ亮吉 —

クリーン三木
デーティマスキー

— 独禁法
— 三木首相 —

やはり野に置けレンゲ草

— 永井文相 —

一九七四年度
党首並びに首相在職につき
追徴金一億八千万円也

田中前首相殿

— 大平蔵相 —

狭い日本
なぜに血をみる選挙する
— 血の逆流を覚える候補者 —

★目次 1975年3月号

巻頭言 1

いたづら小鬼のゆくえ(2) 2

アナキズムの復活 5

実録大正十二年の東京メーデー 11

野火 12

弥栄之共同体から 15

編集室 16

立春

1975年3月 巻頭言

木枯しが吹き抜け、氷もとけはじめ、なんとなく土の上や中で生き物が動きはじめている気配がする。官公庁の役人も動いた。

近年まれにみる名言をその役人の一人、警視庁の警部が語った。至誠、天に通じると考える」と言ったのだ。街の狂犬を取締る良犬、忠義一途に天に至誠を認めて欲しかったらしい。

世の中、おまわりさんがいないと犯罪者を取締るものがないなくなるから犯罪が増えると思われている。僕も人性荒廃の極、利を求めただけで、利を求めた傾向があるからこそ、それに反抗するという人が少なくなつた今、犯罪と呼ぶべきかどうかは知らないが、ロクでもないことが多くなつてどうにも仕様がなくなつて思う。だけど、人口が増えれば、それも局所的に増えてしまうとどうしたつても根本的な犯罪が隠蔽されながらも顕在化してくるのだ。そっちの方の犯罪ともいべきものを知らぬ、ぞんぜぬで通し、自転車の無灯火にまで目を光らせる暴犬にはいささかけつとばしたくなる。

至誠、天に通じると考えた良犬は思うに一つの権威を知らず知らずのうちに作り上げ、それに寄りかかることで逆に権威をつけようと、秩序に対する強い愛のかわりに暴力によって秩序を保とうとしているのだ。至誠、天に通じる先の天が人民ならいいじゃないかという人もいるが、なんでそれがいいものか。天が人民だろうと、天が人を作つたのでもなければ、そんな一つの狂気に満ちた象徴を作ることほもつともつと支配して下さい、とお願ひしているようなものだ。

誰でも権威に寄りそい、自己犠牲を他人に見てもらいたいヒロイズムともロマンチズムともつかない心性を心の一部には持っているのだろう。でもそんなもの、支配の役に立てようとする意図見え見えの時はかみつかなければ。実際、おまわりさんは密告という人類の精神を荒廃させる制度が好きで、しかもそれを市民協力などとほざいて義務のような顔をして、至誠なんて語るのだ。

思えば世の中、不必要なものが増え、そんなことをやるために役人が増え、福祉が増え、直接税は減つてきているらしいが間接税がものすごく増え、どうにも住みにくくなつてきた。まったく全然地方税なんか滞納している僕でも大のエサ代はおれの血じゃないかと考えてしまふ。もつとも大も、おれはおれの血でやしなわれているんじゃないか」と考えているかもしれないが。

カプーター (Kahote) とは童話にある「小鬼」の意で、花園の土中に住み植物や小動物と自由に話ができて、例えばシエクスピアの「真夏の夜の夢」にでてくるパックのようなものと考えればよろしい。この運動の推進者ロエル・ファン・ダイン (Roel Van Dijn) はハーグに生れ、母は接神論者 (オカルトの信奉者)、父は小説を書く会計士で、ティンエージャの時代はバートランド・ラッセルの影響を受け、一九六一年にアムステルダムへ出府して、芸術史と哲学を同大学で学び、ここで (一九六五年) プロボの機関誌を発行し、六〇年代の新左翼学生、芸術家、知識人の支持を受けたと言われている。けれどプロボが暴力的傾向を持ちグループの一つは「絶望軍団」と名付けていた―解体する結果になったのは述べましたが、この時アムステルダム市会に選出されていたファン・ダインは攻撃的方法を創造的に活用し、疎外に抗議するとか、工業化された消費社会、中央集権化された社会の病気には抗議だけでは不十分で、むしろ「実現したユートピア」こそ建設しなければならぬ、時間

は短いだから明日しなければならぬことを今日するんだ」という考えだったそうです。そこで一九七〇年へ今日の世界における明日の代替社会」としてオレンジ自由国を創出し、これは単に政治上の国家を意味するだけでなく、自由な状態、条件を提供するものでした。オレンジ自由国では参加した託児所、反権威的幼稚園、学校、無害食料品店、非常利事業所、マーケット等を傘下に入れ、十二の各部門は実際の政府機関の代替になる名称と業務を行うことにしたのです。例えば「旧社会」の国防省は「きまった役割と服従の習慣をサボル省」となりその仕事は「責任をもった脱走兵」を得ることでした。運輸省は自動車の屋根を花園にしようと呼びかけ、これは現実の市機関から公害を少くするからとして禁止されませんでした。住宅省は空屋に押入り、水道と暖房を取付けて家のない人達が住めるようにした。保健省は老人のために時間ぎめのサービスを組織し、老人に代ってゴミを捨てるとか、雑貨を買って来るとか、スूपを運び寝間ではバイブルを読んであげるとか、これらはすべて無償の奉仕でしたから、この運動はヨーロッパ有数の人口稠密国で一般の支持を受け、アムステルダムの市会議員選挙で、11%の投票支持を持ち、忽ち5議席を獲得したのです。

選出議員はすべて「旧社会に派遣される新社会の大使」ということでした。そこでデンマーク、スエーデン、ベルギー、フランス、ユーゴスラビア、でも同じようなグループの結成をみたと言うことです。

けれどオレンジ自由国はその過大な期待を遂行することが出来ず、また方法論では「現実家」と「ユートピスト」との確執が起き、ほぼ内部的な要因によって、賢くもレーニンが予言した通り「国家」は衰頹したのでした。それは一九七一年五月でした。

童話によるといたづら小鬼は朝日が昇って未だ地上にいと死んでしまうそうです。対抗文化を担って出てきたカプーターはそうたやすく死ぬのだろうか？ 今、アムステルダムを旅行して、カプーターの跡を訪ねても容易にはみあたらないという。カプーターの店は閉じられた箇所が多いでしょう。けれど旅行者はアムステルダムの街筋で白色の電動小型自動車に行きあたるも知れない。それはプロボの一員であり、市議にもなったことのあるルド・シンメルベニンク (Ludd Schimmel Pe nink) 君の発明した電動車です。これをニューヨークタイムズから摘記してみよう。

— オランダ・アムステルダム 8月4日発 —

世界の大都市で自動車による輸送の混雑と公害がこれ以上続いたらどうなるだろう？ 37歳の技術者、前アムステルダム市議、革命的プロボ党の一員であるルド・シンメルベニンク氏を把えたのもこの課題であった。(中略)氏は交通問題について、電機的に駆動し、二座席のポリエステル製小型自動車による「ホワイトカー」計画で答えた。同氏は自分を理想家だとして次ぎのように述べた。「基本的には反公害キャンペーンを根幹とすれば、交通渋滞は第二の問題です。われわれ一二〇〇名の会員を持つホワイトカー協会ではアムステルダムが住める街にすることを第一として居り、第二としてこの自動車に関心を払うのです。というのは貨物搬送の商業車とタクシーを除きすべての個人所有車は禁止する意向です。」

ホワイトカーは車高6フィート、車長6フィート、車中約4フィート、時速約19マイルである。車の色が白色なのは、「プロボの色が白だったから、また多くの車が白なのは純潔と汚染されていないのをシンボルにしたものです」と同氏は答えた。

市議会は最初この計画に賛成を渋ったが、十月十五日の開店をめざして、資金を出すことに同意した。各ステーションでは7台を一組として保有する。

計画ではクラブ制ということである。ドライバーは参加費(終身)24ドル、ホワイトカーのキーに対して24ドル支払う。走行距離は、自動的に記録され、ツケはユーザーに廻送される。各ステーションは自動車のバッテリー充電設備を備えることになろう。

シンメルペニンク氏は言う。「われわれはロンドンで試乗した。あちらのバッテリー業者が乗り気だったからです。エンジンは二千ワットの電力ユニットです。測定によって、アムステルダム市中心地への乗入れ距離を一マイルちよつと(一マイル＝一六〇九・三m)市のどこからでも中心地へは約二マイルと規めました」。

自動車製作費は一八七五ドル(邦貨約五六万二五〇〇円)。試作車は一九七二年五月廿四日、アムステルダムで公開された。彼のねらいは一九七四年迄に市で稼動する車台数を一五〇〇台にしたことである。シンメルペニンク氏は言う。アムステルダム周辺に約一五〇箇所のステーションを配置し、ユーザーは少し歩けば車にたどりつけるように駐車場を確保したい、とのことである。……市議会は発言した。「技術的にまた市の交通問題の観点から問題を検討した。その結果は討論とは別に実際の交通条件において実地テストを行うのが適当と思う」。

スポークスマンはつけ加えた。これは市議会がこの計画を全面的に支援して青信号をだしたことにはならないのだ」。

シンメルペニンク君の小型自動車の発明はそれがプロボカプーター運動の内部から生まれ、反公害キャンペーンの道具として、現実の代替として謙虚に提出されていることに意義がある。既存のものを破壊して建設すると声高に息まきまくのでなく、孜孜として自己に合った仕事をするのが結果において建設を担うことになるのだ。しかしそれには明確な視点ともの考え方、日常化した態度が必要条件で、そしてそれを支えるのが同志的な連帯である。今回はアナキスト陣営内部でのカプーターについての争点、ファン・ダイン君のクロボトキン理解と彼の思想を探ってみよう。アナキストは「物事のはじまりを考えるとそこから出発する」し、ある運動の背後には必ず思想があるとするのだから……。

(つづく)

■アナキズムの復活

山中邦久

アナキズムにおいて、ある意味で問題の設定自体がすべてであるように思える。ひとりでアナキズムというが、アルヴォンの言うように「アナキズムは一定の統一見解を付与する歴史法則にもちろん従うとはいえないもの、たしかに類似しながらけつして同一ではないいくつかの教説から生まれたのであるから、そのさまざまな構成値にたいして共通分母を見出し、意識的にしろ無意識的にしろつねに分化しようとする諸体系の集合値、一般概念を抽出することがはたして可能かどうか」^① 検討する必要があるだろう。アナキズムという言葉の多義性が、とくにアナキズムの致命傷にもなり得る。このことは誰もがくりかえし述べてきたことでありながら、明確な問題意識として理論化し得ないところに、また、アナキズムの弱さがあるのではないだろうか。今日においての「アナキズムの復活」という問題設定に関して、大沢正道氏の言う「現実離れのした理論の戯れ」であり、それが歴史的アナキズムの復活として「かつての運動の歴史の拡大再生産」に過ぎないだろうことは充分にうなづける。

しかし、そのことが過去のアナキズムの特徴であり、またばくの出発点であるが故に必要な問題設定であると考えている。

端的に言って、ぼくは日本におけるアナキズム運動の特徴を「政治的特質」であると思っている。同時に、その「政治性」こそ過去のアナキズムの問題点であった。大沢正道氏は「アナキズムと民衆史観」^②の中で、外来思想の定着の条件をめぐって、アナキズムをどう受容したかを問題にし、日本に伝統的な混合主義に全面的に依存することによって、伝統保守思想を温存した天皇制という近代国家システムを確立した当時の支配階級に対して、「明治の社会主義(アナキズムも含めて)」は、この混合主義の伝統と対決し、それを克服するところから出発しなければならなかったのに、実際は支配者側と同じ道を歩んでしまったとを指摘している。そのため「社会主義は国家や資本の日常的な、直接的抑圧に抵抗するためには急拠西洋から輸入された武器以上のものにはならなかった」^③ であり、アナキズムにおいても非政治的乃至反政治的というスローガンにありながら、その具体的運動展開にあつては、戦略戦術的アプローチにとどまる政治的な活動に過ぎなかったのである。そしてこの基本的

な流れは、戦後輸入された多くの思想の風化の中で、確実に定着していくものがサイバネスチックといった技術のみであって、国家の強化に役立つものばかりであるという事実において現代にも引き継がれている。それ故に、衰退・復活の起伏をくりかえしてきた歴史のアナキズムの生き続ける一つの伝統においても変化はなかったと言えるのではないだろうか。

今、新しいアナキズムは、この伝統と対決するところに出発点を見出さなければならぬだろうし、この克服なくして「アナキスト」としては生きて行けないことを感じる。現代のアナキズムに大きな示唆を与えている「アナキスト」が、たとえばG・ウッドコックにしても、大杉栄や大沢正道にしても、意識的に過去のアナキズム運動から離脱していることは特徴的であるだろう。「アナキスト」は「アナキスト」であるよりも前に、「人間」でありたい。そしてこの関門を通過してこそ、アナキズムの多義性を乗り越え、真に「アナキズムは復活する」のではないだろうか。否かえって、この支えであり、これを可能とするものこそ何よりも「アナキズム」の目指すと同時に本質である「自由の論理」そのものではないかと思えるのである。

の全否定による政治を越えた次元での非政治的な「生き方」の訓練として有効性をもっている。この訓練はクロポトキンの言う「正義の観念の研究」に役立つだろう。ぼくはここにネオ・アナキズムの特徴を見る。対抗文化あるいは対抗革命は、オランダでもイギリスでもフランスでもアメリカでも、そして日本においてもアナキズムとは直接かかわらない地点で発生し、やがてアナキズムとなんらかのかわりをもつに至っている。同時に、大沢氏の言うように、アナキズムの側にこの対抗革命を主導できるほどの力が、思想としても運動としてもなくなっている事実の確認を、オールド諸氏はする必要があつたかも知れない。しかし、この発想はもはやあまり意味のあるように思えない。むしろぼくには、この見方は過去のアナキスト側からのものではないのか、という疑問が残る。

「アナキズムの『甦生』がノンセクト運動の全国的勃興と、革命思想、とりわけマルクス主義の多様化という現代的思想状況」^④の中で、「アナキズムの側から主体的な検討なくしては『甦生』の言葉は空虚な響しかもちあわせない」^⑤ことは事実であるし、「現在のアナキズムの思想情況から考えあわせるならば、アナキズムはま

× × × × × × × × × ×

J・ジョルはアナキストの伝統は三つの異なった方法でみることができるとし、主義として、つまり社会組織と社会関係に関する一組の思想として、運動として、つまり革命の技術としてと、もう一つはある種の気質としてという三点を教えている。結論的に言ってしまうと、過去のアナキズムは運動として、ひとつの技術として考えられることが多く、また現代の状況から発生する対抗文化は、無意識のうちに気質としてのアナキズムを表現していると思えるのである。対抗文化における強力な勢力としてのアナキイ——それはアナキズムというレッテルを付けられないことが多いとしても——の特徴は、エスタブリッシュメントに対して曖昧に共存させることをせず、異質な価値を正面からぶつけることにより、双方の否定、解体を通じて全く新しい別個の価値を創造しているところにある、とぼくは考えている。自分自身の内面化された革命体験（自己変革）による自己の再生という作業の中で復活されつつあるアナキズムは、政治原理であるよりも、むしろ生き方であり、倫理原理である。新しい社会闘争の形態としての異議申立てのイデオロギイという「政治参加」は、裏がえせば「政治的なもの」

すますアナキイ一般と同一視され、あたかもアナキイステイクなるものがアナキズムであるかの如くに、その思想的形骸化と空洞化はいっそう顕著なものになる」^⑥という千坂恭二氏の指摘は重要であると思う。しかし、そのことが早計に「アナキズムが叛乱のアナキイな心情の代弁物ではあっても革命の思想——運動たりえなかつたのは、まさに革命の世界綱領を有しえなかつたから」^⑦という結論に結びつくかぎり、その「鉄の団結」も過去の拡大再生産に過ぎないのではないだろうか。心情的レベルでの「叛逆」がアナキズムとして通用し、「無数のわけの分からぬアナキイが、ア・ブリオリなる不定型叛乱主義、自治管理主義、小市民的反戦主義として、自称アナキストの雑派を形成し、アナキズムが反国家以前でまったく心情的に勝手気ままに解釈され、流布されているという、まさに憂うべき情況」^⑧として現代を規定することは、アナキズムを革命の技術のみとしてかえって狭小化してしまうことにならないだろうか。アナキズムとは、そんなケチなものなのだろうか。

アナキズムにとって、ネオ・マルキシズムほど歴史的検討と原理的検討は容易ではない。何故ならば、歴史的にアナキズムの一般概念は抽出が困難であるばかりでな

く、なによりも「根底的視座ともいうべき原理」方法的な、いわば帰るべき「マルクス」がないからである。アナキズムという名辞はあっても、実がないというのがその実情だからである。したがって私たちは自身でこれを構築せねばならぬ。^⑨が、しかしそれが世界変革の政治的技術として構築されるかぎり、アナキズムのもつ倫理原理は死滅してしまうのである。マルクス主義の倫理がもつ恐るべきマキャベリズムは、人間の一切の活動を共產主義建設のプログラムと共産主義革命の戦術とに、あるいはこれらの推進者である「共産党」の党規律のもとに従属させ、埋没してしまう傾向であり、目的のためには手段を選ばずという独断的善の押し売り、つまり一切が戦術の問題に還元されてしまい、あらゆる問題は純粹政治の論理でおしはかられ、個人は他のなものにもかえがたい個性的性格とその価値とを喪失し、頭数の計算の論理のうちに解消してしまうことにある。そして、その批判理論としてまさにマルクス主義に死滅されたはずのアナキズムは、「復活」したのではないのだろうか。それはアルヴォンの指摘にある通り、政治的要素が歴史の進行の中でいかに陳腐になろうとも、「アナキズムの純粹に道徳的側面となると事情は異なる。あらゆる個人の本

源価値を徹底して肯定すること、自分自身の掟にしたがってわれわれ各人が自己啓発を行わねばならないこと、そして最後に、自分自身になる自由、したがって社会生活をわれわれ個人生活の延長とするような自由を保証すること、ここにはまだ古くなっていない思想がある。いずれ機械万能主義がゆききつくと思われる非人間化に世界が反対し、そうでなくとも全面的平均化に脅かされている昨今、健全な個人主義に通ずるかぎりでのアナキズムはふたたびあらたな現実性を持つことができよう。^⑩と考えられるところにある。同時に、アナキズムほど「民衆」の創造力、建設力を愛し信頼する思想もなかったそれは単なる民衆讚美ではない。アナキズムは民衆の観察と正しい評価を基礎にしているのである。それ故、アナキズムにとって「前衛意識」や「党一大衆」という課題が少く、だからこそ「アナキストにとって、マルクス主義とはアナキズムに止揚される対象でしかないのである」。^⑪

アナキズムにとって、革命技術のみの要求から生じる独断的な側面（道徳的シニシズム）の強調は、その死を意味するだろう。アナキズムの持つ実存的な側面、正義の手段が即正義の目的への一步であるという特徴は、カ

リヤーエフのように、一人の子供の生命も、革命の勝利の犠牲にはできないために、革命を明日に延ばすこともあるだろう。しかし、アナキズムの根源的な問いは、いかに革命を成すかよりもむしろ、「如何にわが生を拡充するか」であり、ぼくらはいかに生きるかであると思う。今、ぼくたちは「過去のアナキストたちは倫理的であるかのようによそおってはいしたが、かつてアナキズムが真に政治性を脱したことはなかったという事実を認識すべき」^⑫だろう。そして「人間の本性について、歴史のアナキストが認めていた以上にもっと実存的な見方が受け入れられなくてはいけない」^⑬。アナキズムの革命は、「アナキストの革命であってはならないのであり、「アナキズム」はその党派性を脱し、「現代」を止揚することができないかぎり過去の遺物に過ぎない。

アナキズムという概念は、アナキイと同様、両方向的（アンビバレント）概念である。そしてそれは、マイナスの方向でアナキズムがアナキイ一般と同一視されるとき、哲学的に深化するどころか、戦術的アプローチに走り、政治的独善的な純粹主義に陥る、という相関々係をもっているようだ。肯定的であれ、否定的であれ、アナキズムが現代の状況に対してできないとする見解は矛盾である。

何故なら、実体がないものがどうして対応できるだろうか。「アナキズム」が先にあるのではない。まさに現代の状況こそアナキズムなのである。アナキズムの思想性とは、生きた人間に担われて実在し、人間はそれによって人間であることを、その主体性を確保することに他ならない。今日の「勢力はどれもとって代るものではない。しかしながら、これらはきわめて様々な次元で、既成社会の、その体制の封じ込め能力の限界を輪郭づけたのである」^⑭。彼ら「闘う若者たちは、あやういのは自分たちの生、政治家や経営者や將軍たちの手でおもちやのように扱われている人間たちの生なのだ」ということを知っているか感じとっているのである。反乱者たちはこれらの手からその生を取り返し、それを生きるに価するものにしたいたいと思っているのだ。^⑮ 彼らの力を信じられないものは「アナキスト」ではないだろう。彼らを無力な大衆と規定することによって、アナキズムの純粹性を保とうとすることは、国家を含めて除名規定や厳格な規律を要するあらゆる組織のもつ圧力であり、「アナキズム」からの、現実からの逃避である。アナキストの連合が、科学者と同じ過程で、専門領域外での知的交流を失い、数少ない小さな範囲での仲間と議論することに陥るなら

は無意味である。そして、プロバガンダも、このようなコミュニケーションの根本的な欠陥の改善には少しも役立たないだろう。この時、「重要な問題は——とルネ・デュボスが指摘するように——さらに迅速で、正確なマスコミの手段を開発することなく、むしろ、われわれ（科学者であるなしにかかわらず）が、多くの人々と共有できる経験を、直接、他人にどう伝えられるか、その方法を学ぶことである。」^⑩（この意味で、特定のグループに限定せず、様々な運動と自由に連帯する情報紙作りに努力している「リベロー」を支持したい。）

現実には耐えられないような思想や知識は「にせもの」に過ぎない。とりわけこの社会にあつて見分けのつかなかった「にせの」要求、押しつけた欲望と真に自発的欲望とのきわめて困難な識別の能力の大衆的発生、「新しいエートス」の造出、つまり大衆的想像力の自立こそ、アナキイ一般どころか真の「アナキズムの復活」を示しているのである。そして、彼らに、また「アナキスト」に必要なのは、常に継続される「批判的省察」^⑪であるだろう。アナキストの中で、このことを深く追求したのは大杉栄である。彼は「知識としての『アナキズム』を棄てることで自己の実存の自立を達成しようとした」^⑫。

大杉は行を知に一致させるのではなく、知を行に合わせるという知行一致の方法で、知識の上でのアナキストから真のアナキストに脱皮している。ネオ・アナキストの多くは、クロポトキンを知らずに、即ち知識としてのアナキズムを経ずにアナキストであった。現代の状況が気質としてのアナキズムを表現していることは、大杉を支えた彼の情熱（パトス）に通じると言えないだろうか。人間的行為の情熱は、自己自身を論理化（ロゴス化）することによって真に行為的パトスたり得るのである。アナキズムは人間のパトスから生まれた論理、即ち哲学であるとき、真にアナキズムであるのではないだろうか。それこそ、甘っちょろいと言われるかも知れないが、ぼくは「愛知」だと思っている。

⑩ ⑪ アンリ・アルフォン（左近訳）「アナキズム」白水社（文庫クセジュ）

⑫ 大沢正道「アナキズムと民衆史観」東京新聞（46・6・5付夕刊）

⑬ ⑭ ⑮ 千坂恭二「無政府主義革命の黙示論」情況（72・2月号）

⑯ G・ウッドコック（中村健二訳）「ネオ・アナキズム」現代思想（74・4号）

⑰ H・マルクーゼ（小野二郎訳）「解放論の試み」筑摩書房

⑱ ルネ・デュボス（野島・遠藤共訳）「目覚める理性」紀伊国屋出版

⑲ M・ホルクハイマー（久野取訳）「哲学の社会的機能」晶文社

⑳ 大沢正道「大杉栄集」解説 筑摩書房